
「 4 」

しゃヴえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「4」

【Nコード】

N77590

【作者名】

しゃヴえ

【あらすじ】

演じ続けてこの世界に雪絵はいる。

雪絵は「彼」を語ることで「私」を手に入れようとする。

「彼」から教わった表現を使って語る「私」は誰なのか？

雪絵は自分自身を表現できるのか？

「私」が語る「私と彼」の最後の物語。

4の1(前書き)

繋がるのか？ 繋がらないのか？
その答えは読む貴方に委ねます。

4の1

0

私は私を語り、ボクを語り、俺を語り、彼を語った。

だけど結局、私が誰なのか答えは出ない。

いや、違う。違うの。

私は私を知っている。覚えてる。

だけと思出したくない。

だからこんな遊びを思いついた。

私は役を語ることで私を偽っているだけで。

彼を語ることで私を作っているだけで。

1

目が覚めれば白い部屋。

でも、これは妄想の中なんかじゃなくて、みんなが現実と呼ぶ世界。

3

私の住む世界。

白いベットに鉄格子のついた窓。鍵が閉められた扉。それだけ。

それだけの世界。

これが私の現実。

私はこの世界で雪絵という名前を使わせてもらっている。

私は雪絵という名を与えられている。

私は雪絵。私は雪絵です。

だけど、この世界が何なのかわからない。この世界に属する私がわからない。

私の役がわからない。

この世界で私は何を演じればいいのか？

私の生きる意味は何？

わからないよ……

私はだから逃げるんだ。妄想の中に。
いつか雪絵のお話が終わることを願って。
雪絵の先を見るために。

私は、私は。

雪絵の役をやめたいのです。

目を閉じて黒い中に私を降ろして、彼を思い出す。

2

少しだけ彼の話を。

私がまだ中学生だった頃の話です。

最初、彼がどういう人なのか詳しく知りませんでしたし、知るつもりもありませんでした。

一人で教室に残り、ぼんやりと窓の外を見る彼を私は風景の一部と扱っていたのでしよう。

それが私の日常でした。なにもおかしいことはなかったと思います。

いつもと同じ風景。同じ様な毎日。なんとなく過ぎていく沢山の一日を繰り返しました。

同じ道。同じ空。同じ場所。変わらないその中で昨日と今日の小さな差異を話し合い喜ぶ私たちがいました。

繰り返しました。

繰り返し続け、中学生でいられる最後の一年間。受験世界に私は着いていました。

今までばやけて霞んだ姿だった受験の二文字は、明確な形となって教室を支配しました。

受験世界を通して、クラスメイトの別の一面を知りました。みんなが考えていることを、目標を知りました。

私の目の前に沢山の選択肢が現れました。私はどれを選ぶか困ってしまいました。

目標がなかったのです。

みんなと違うという不安。

何も考えていなかった私は、受験世界の登場人物を演じるしかありませんでした。

授業が終わり、放課後になればみんな教室を出ていきます。私も残されてはならないと出ます。

それを繰り返しました。繰り返しました。

春から夏へと季節が変わりました。繰り返しました。

夏から冬へと季節が変わりました。繰り返しました。

教室からクラスメイトが次々と去って行く中、私は動けずに残ってしまいました。今思えば何故残ったのかわかりません。演じるのに疲れてしまったのかもしれませんが。

遠くからみんなの声が聞こえてきます。私は目を閉じて机に突っ伏し、その樂しげな声を聞いていました。聞こえなくなるまで、聞こえなくなるまで。ずっとずっと。

私は目蓋の裏を見続けました。この黒の中で何か見つけられるかもしれないと見続けました。

見続けて、飽きて。そのまま耳に入る音を聴いて、飽きて。

今の私にも飽きて、でも私は私以外になれなくて。

目を開ける。教室は赤くて淡い光色に彩られていました。

窓の外には私の知らない夕焼けがありました。空が世界を燃やしていました。

深い赤はゆっくりと淡く青へと、深い青へと拡がっていました。

私は空の境界線を見つけられませんでした。

私はこの赤と青に、この世界を焼き尽くして欲しいと願ってしまいました。

燃える世界。そこに私はいました。

燃やされて、煤けていく私の世界。

この世界の風景と混じり合う彼の姿がありました。

いつものように。変わることなく。

彼はこの世界をどう見ているんだろう。

何を思っただろう。

私は彼に尋ねました。

この世界は赤いのか青いのかと。

4の2(前書き)

脱字修正……

4の2

1
目を開けて、白い部屋。

ここには何も無い。
何も無いよ。

ここは管理された世界だ。誰かが見てないと壊れてしまう世界。
ああ、ああもう嫌だ。もう嫌だよ！！

見てる。見られてる。見なきゃ私たちは壊れてしまうから。

ああああ、ストップ。止まって！ 止まって私の思考！！

何も考えたくないのに！

私は雪絵だ！ それ以上でもそれ以下でもないのよ！

お前達は消えてしまえ！ 私に質問しないで！

答えなんかわからないよ！ 知らないわよ！

助けて助けて……

逃げよう…… 逃げるんだ。

彼の話をすることで私を維持する。

維持するべき私がいるのかどうかわからないけど、彼を語れば私

を語ることが出来る。

目を閉じて、また、彼の世界に……

2

あの夕焼けの教室世界で私は彼にこう言った。

この世界は赤いの？ 青いの？ と。

私は彼に聞いた。だけど、彼は何も答えない。

聞こえなかったのかなと、もう一度この世界はどちらなのかと訊いた。

だけど彼は答えてくれなかった。

沈黙。

この人は本当に風景なのかもしれない。そう思ったその時。

「雪絵さんはどう思うの？」

振り返りもせず彼が言った。

私は彼の言葉に貫かれた。彼は質問を質問で答えた。驚いた。驚愕。

「雪絵さんには世界はどう映るの？」

彼は身を翻し、私を見る。夕焼けを背にした彼の表情はわからない。ただ、二つの目が私を見ていた。

私はこの世界をどのように見ているのか？ 考えたのだが沢山のことが頭に溢れてまとめることが出来なかった。

私は答えを出せなかった。

「答えは出ない……よね？」

彼は首を傾けて腕を組んだ。そのまま彼は語りだした。

「君の言う世界がどの世界のことか僕にはわからない。だから君の質問に答えられない」

だから、彼はそう言って一旦間を置く。

「だから、ボクは君が見る世界を尋ねたんだ」

「君の見る世界はどんな感じ？」

もう一度、彼は言った。私は答えられなかった。

「ボクと君は同じ世界住んでいる。だけど見る世界の形は違つと思
う」

なんで？

「ボクと君は同じじゃないから」

彼はバツサリとそう言い切つて、背伸びをする。

「ここにいるとよく質問をされるよ。何を見ているの？ ってね
ははっとなんて笑う。

「見ているものを空と言えはそれで終わる話だよ。でも尋ねられた
以上の確に答えたいんだ。そうなる……」

彼は言葉を途切れ途切れ紡いでいく。

赤くて青くて、でもどちらでもなくて。黒いときもあれば白いと

きもある。白でも黒でもない。

暖かくて柔らかくて、でも凍るような硬さで。

怖い時もあれば優しい時もある。

「結局見るものを語ろうとすれば終わりが無い。何処かで止めないといけない」

どういうことなのか私にはわからない。

「僕たちはその時の気分で好きなように語れてしまっただよ。ボクたちは今生きている。楽しく生きている。楽しいよね？ だからこんな会話をしている。今も知らないところで人は死んでいるだろう。だけどそのことを知らない。知らないものは存在しない。だから笑える」

そんなことを言ったら私たちは笑えなくなる。

「その通り。でもボクたちは笑っていられる。だってボクたちが死んだわけじゃないから」

冷たい人ね。

「そうかもしれない。でも君は地球の裏側で男が一人死んだと聞いたら泣けるかい？」

答えられない。

「泣けないさ。泣く人ももちろんいるだろう。泣けるのは死んだ男のことを知っていた人だけ。知らなければ泣けない。無く必要はない。いないのと同じ」

彼は覗きこむように私を見ている。

「物語が無ければ、泣くことも笑うことも出来ない」とボクは考えます

あなたそれでも人間？

「君は人間？ その質問をする君は人間？」

意味がわからない。あなた、頭おかしいんじゃないの？

「おかしいのは君かもしれない。ボクが異常なら君は正常なの？」

私はおかしくなんか無い！

「君は自分を語れるかい？」

いきなりそんな事を言う貴方は異常よ！

「君は誰かの真似をしていないかい？」
うるさい！

「ボクはいろんな人の真似をしている。それがボクを作ることだと思っているから。僕の表現も誰かがいてこそ今がある。これは異常なの？」

異常よ！

「本当に君は誰の真似もしていない？ 言葉遣いや身振り手振り。君の表現は本当に君だけのもの？」

当たり前よ！

「君を語ってよ。教えて。君の考えることが知りたいな」
気持ち悪いのよ！

「じゃあ終わりにしよう。変なこと言っでごめんね」

そう言っただけは鞆を持ち、ゆっくりと教室を出て行った。
頭がクラクラした。わけわかんなくなった。

彼は人間じゃない。人間のフリをした別の生き物だ。

彼の言うこともわかる。けど、それを口にする彼がわからない。
私は教室に残されてしまった。

燃えカスの教室に私は立っていた。

4の3

1
目を開けて、白い部屋。

ここには何も無い。

何も無いよ。

ここは管理された世界だ。

あはは。管理されている。

はは、終わらないわ。

この世界に私を置いて楽しいの？

もう、私は疲れたの。だから終わらせて。

目を閉じて、彼に会いに行く。

現実と虚構の境目がわからないまま。

2
私は夜空は黒なのか考えながら、歩く。

いつもと変わらない夜空。毎日見る景色の一つ。

でも、空を長いこと見ていなかった。

空は姿を変えるけど、空は別のものにならない。

そんな当たり前のことが浮かぶ。

次の日。私は彼と再び話す為に教室に残った。

彼はいつもの様に窓の外、今は夕焼けを眺めている。

彼から話しかけられるかと思っていたのだけど、外れたようだ。

彼を知るためには私が声を掛けなくては……

「昨日はごめんね」

唐突に彼は口を開いた。

「酷いことをボクは言った。あれは確かに異常かもしれない」

そう言っただけは彼はこちらに向いて、頬を掻く。

「赤いよとつても」
え？

「君がした質問の答え」

ああ、そんな事をまだ考えてたんだ。

優しい？

「優しいかもしれない」

怖い？

「怖い……かも。いや怖いと思う。この世界のことを語るのは難しいね」

そう言つて彼はもう一度窓の外の赤を見る。

「仮にこの世界から出る方法があるとしても、出た先も同じかもね」

どういうこと？ 私は……

「いや、これはどうでも話だね。ごめん」

待って。

帰ろうとする彼を引き止めた。

「ん、なに？」

貴方が見る世界はどんな形をしているの？

「さつき答えたよ？」

あれは……その私の言葉が足りなくて……

彼はそのまま動かず次の言葉待ってくれていた。

あの質問は……窓の外の景色のことなの……

「ああ……そうだったんだ」

彼は笑った。

「ボクはまた失敗しちゃったみたいだ。君の言葉をちゃんと理解していなかった。ごめん」

また謝る。

「まあ、その答えも赤と言っておくよ。今赤いから」

彼は空を指して、だよな？ と言。

「赤でも青でもないけど、赤ということ。じゃあね」

待って。まだ話したいことがあるの。

私は嘘をつく。彼は困ったのか悩んでいるのか、腕を組んで首を傾げる。

「何か面白い話？」

うん。とつても面白い話。

「本当に？」

本当よ。

私は言い切る。彼は黙ったままだ。

なんで私は彼を引き止めているのだろう？ 彼と話したいの？

わからないけど、わからなくていい。

聞かせて欲しいな。と彼。

沢山聞かせてあげる。と私。

「とりあえず場所を変えようか」

そう言つて彼は教室を出る。私は彼を追う。横に並ぶと彼は、ははつと笑つた。

何か面白いことでも？

「うん。とても」

何が？

「君がボクと並んで歩いている」

それが面白いの？ 変なの。

「変で結構。十分面白いよ」

私が？

「いや、この状況。場所はどうか？ 公園でいいかい？」

公園なんて近くにあった？

「あると言えはあるのさ。ここはそういう世界」

そういうもの？

「そういうものだよ。夜の公園か。きつと静かだろうね」

3

冬の公園。馬鹿みたいに寒い。寒いのは冬だからだろう。

「その表現、馬鹿みたい」

彼が笑う。

じゃあ、公園には私と貴方だけ。他には誰もいない。会話も弾まず見も心も寒い。

「面白いけど機械みたい」

貴方はここをどう語るの？

「さあ？ ここは公園だよって言うておしまい」

伝えることを放棄してない？ 投げやりでは？

「確かに」

そう言つて貴方は自嘲的に微笑む。

「いいね。その語りは面白いと思うよ。変だけどね」

貴方もね。

「彼と私は変の一言で片付く」

変な語り。自分を彼つて言うのは変よ。

「君の思考を語つたんだよ。変？」

先読みすぎでは？ なら私はこう語るわ。

私はそう言つと彼は飲み物を買ってくると言つてベンチから立つ。

「いやいや、買いに行かないよ？ 展開を先読みしたのか。面白い」

つまらない会話よ。私は思った。

「君は面白いよ」

その後に変だけどねと彼は付け加える。その通りよ。と私は頷く。

「君はこの物語の作者かい？」

そうよ。だから私は語るの。

「面白いね。ボクはどんな登場人物？」

名前のない人。確定されない人。

「じゃあ作者の期待に応えないとね。何飲む？」

何が？

彼は飲み物だよと言つた。

悪いわ。私がそう言い終わる前に彼は行つてしまった。

飲み物なんていらぬのに。そう思つていたら、彼はもう帰つてきた。

「これしかなかったんだ。ごめんね」

随分と早いね？ コーヒー？

「うん。コーヒーだよ。そこに落ちてた」

落ちてた？

彼は空き缶を私にくれた。

貴方ってやつぱし頭がおかしいんじゃない？

「だろうね。じゃあそれはボクが貰うよ」

彼は私の空き缶を取る。

私の飲み物は？ ないの？

「あるよ」

彼は缶コーヒーを私にくれた。今度は中身が入っている。

「冷たい方が温かい方が悩んだんだけど、温かいほうがいいのかな
と」

冷たい人ね。

「コーヒ―は温かいからいいんじゃない？」

変な人。何で私は貴方と話してるんだろ？

「忘れるためじゃない？」

何を？

「さあ？ 物語の都合上明かされないのでは？ とボクは結論付け
ます」

何の都合よ？

「作者の都合」

私の？

「そう。貴方は作者だから好きなように語ればいい
好きに語れば物語は壊れる。

「壊れるのもいいかもしれない」

彼は笑う。貴方を伝えるわ

「私は笑う。君を伝えるよ」

駄文じゃない？

「たぶん駄文」

下らない。

「そう。下らない。君がそう語ればそうなる」
それがボクの言う表現だよ。

「君が楽しいと思う方向に語ればいい。つまらないの一言で片付けないで楽しく退屈を語ろう」

私は言葉に詰まった。

「ボクの物語はボクが語る。君の物語は君が語ればいい。それがこの世界の物語…… かな？」

そろそろ、君は帰ったほうがいい。僕と話していると君は止まってしまう。

ちよっと待って。何を言っているの？

「君はボクを語ってくれるのはうれしい。凄く。だけど、君が壊れれば僕も壊れてしまう」

何を言っているのかわからない。

「君は君の世界を語って。僕はいつでもここにいるから」
もうちよっと細かく書いてくれるとうれしいかな。そう言って彼は笑う。

「昔から本当に変わってないよ」

君は。

彼は片手を軽く振る。

「バイバイ」

彼の姿が風景の中に溶けていく。

本当にサヨナラなの？

貴方は本当にいなくなってしまうの？

4

目を開ける。白い部屋に戻る。

格子の外はもう夜だ。

貴方は消したくないのに。なんで消えたの？

もう一度目を閉じて、彼を思い出そうとした。

だけど、彼を思い出せない。

彼は今何をしているのだろう。

彼は、ボクを語って私に何をさせたかったのだろうか？

私は雪絵。

雪は白いのかな？

私の名前の意味は何だろうか？

また、眠らないといけないのかな？

4の3(後書き)

次の話で終わります。

4の4(前書き)

終わりの話。
短いです。

4の4

1

この世界を全て妄想と片付けられたら楽。

そうすれば私の存在も幻影の一部になれる。

自分を存在しないことにすれば、考えなくて済む。

彼の世界が現実？

私の世界が現実？

どちらとも幻覚？

どちらとも……

ここで私は彼の言葉を少し借用する。

私と彼は同じ世界に住んでいる。だけど見る世界は違う。

彼と私は違う。同じ人間だけど、答えは違う。

私の答えを出す。

この世界が私の真実だ。

この白い世界に私はいる。だけど私は存在しない。

これは幻覚？ 幻覚と断定。

これは現実？ 現実と断定。

私に答えられる事。どちらでもあり、どちらでもない。

彼もそう答えるだろう。

さよなら。

次に会うときは私はたぶん雪絵ではなくなってる。

でも、またね。

4

「という話なんだけど」

いつもの喫茶店で私は彼に物語った。

私のお話を彼は面白いと言。

本当に面白い？ そう訊くと、変だけどねと彼は付け加えた。まさかボク自身が出てくると思わなかったよ。多重構造の世界っていうのかな？ そう言って彼はうーんと唸りながら首を左右に振る。考えているようだ。

「この物語でこの世界を語るとすれば……」

彼は解釈を始める。

「ボクと君が今いる世界は作り物の世界かもしれない、じゃあその上は本当の世界かといったらそれも偽物かもしれない。さらにその上は？ それも偽の世界かもしれない。という事なのかな？」

じゃあ本当の世界はどこにあるのと訊かれたら貴方はどう答えるの？ 知りたいわ。

「ボクの本当はボクの視点によって語られる。それがボクの答えはぐらかさないですよ。」

「答えたつもり」

私と貴方は違うから？

「もちろん。ボクは君と違う」

じゃあちゃんと答えてよ。

彼は腕を組む。

「ボクたちは確かにここにいと実感する。自分が本当だと思つ世界に住めばいい」

この世界は夢？

「夢かもしれない」

誰の？

「さあ？ 君が作者と呼ぶ人じゃない？」

きりがないよ。彼は笑う。水を貰って来るといつて席を立つ。

彼は私の見る幻かもしれない。

私は彼の見る幻かもしれない。

確かにきりがないわね。考えても無駄。でも、考えないのも愚か。彼が戻ってくる。両手の紙コップになみなみと注がれた水。

なんかデジャヴユ。

「ボクたちの起こした行動は何処かで見た光景にしかならない」
私の思考を見透かしたように彼は言つて片方を私の前に置く。

「だから君は語るのだろうか？ 語ることと自分を証明するために」
そうね。私たちは小さな存在。

「ボクたちは粒に過ぎない」

私たちに流れを変えることは出来ないけど。

「粒が沢山集まって形が生まれる」
流れを作ることは出来る。

「そうして浮かび上がった形は世界と呼ばれている。そうボクは語りましょう」

貴方と私は似ているの？

「君は見つけたようだね。君はどこにいる？」

私は答える。沢山の場所にと。

「それが君の答えか。うん」

悪くない。そう彼は表現した。

「君の物語を聴いて今物語が浮かんだんだけど、聴いてくれるかい？」
「？」

聴くわ。

「ありがとう。さてさて……」

彼は語りだした。

私が街で買い物を買って済ませ、さて帰ろうと、人ごみの中、埋もれながら歩いていた時……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7759o/>

「 4 」

2010年11月10日14時55分発行